

# 高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

私のテーマ

## 高知市立第四小学校

### 龍馬誕生地の学校としての誇り

校長  
川崎二三雄



第四小学校は、上町一丁目の坂本龍馬誕生地の碑が校区内にある、その碑から西北へ150メートル程行つた所に学校がある。まさに龍馬誕生地の学校としての誇りを持つて教育に取り組んでいる。

#### 一、学校の沿革

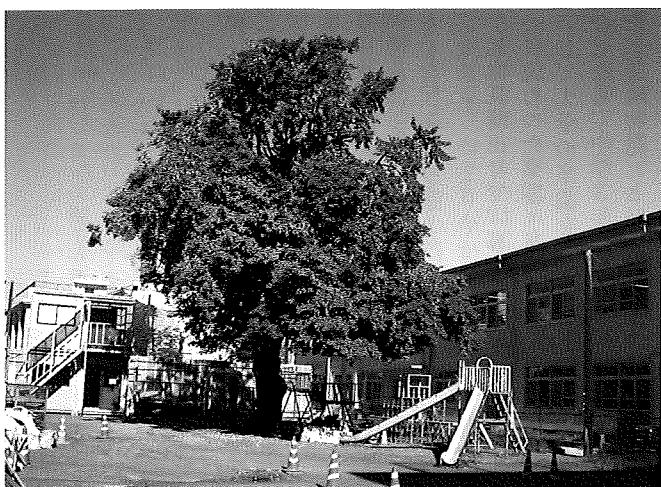
本校の沿革は、明治5(1872)年の学制発布により4つの寺子屋を合併して、順應学舎を設立したことに始まる。明治24(1891)年の市町村制が発足し、旧高知市が誕生する。その際、

高知市立第一、第二、第三、第四尋常小学校がつくられ、昭和22年(1947年)に第四小学校と改称し、現在に至る。歴史で言えば142年前。まさに龍馬の時代の余韻の中だ。

高知市の発足以来の学校では最も歴史がある。明治時代からの学校番号が学校名に残っているといふのも全国的に珍しいとのことである。

#### 二、龍馬とのゆかり

龍馬誕生地の碑とともに校区には多くの龍馬を、また幕末を知る遺跡が残っている。まず、正門横には「子爵河野敏鎌君誕生之地」の碑がある。河野敏鎌(満寿弥)は土佐勤王党员で、文久二(1862)年、龍馬が沢村惣之丞と脱藩する折り朝倉村まで見送った人物である。維新後は官界



校庭に立つイチョウの木「りょうま」

そして、学校の木はイチョウである。校章にもイチョウの4枚の葉が使われている。「土佐洋画界の父」と呼ばれている人である。

そして、学校の木はイチョウである。校章にもイチョウの4枚の葉が使われている。校内にはイチョウの木が3本あり、今から26年前に児童

#### 三、校歌、龍馬の絵と学校の木

入り、副総理、司法大臣などを歴史に足跡を刻んでいる。その他、例えば親友、「饅頭屋」近藤長次郎邸跡の碑、世界への目を開かせた「師」河田小龍塾跡、少年時代、剣道の修練に明け暮れた日根野道場跡などがある。

さらに龍馬を身近に感じさせるのが本校の校歌である。校歌の

「坂本龍馬」の実名入り校歌は本校だけだと思う。

また他にもある。昭和30年代にあつた講堂には、龍馬の立像の絵(1.1×1.5メートル)が掲げられて

いた。その絵は現在は校長室に移された。洋画家、山脇信徳や作家、寺田寅彦などを教えていている。「土佐洋画界の父」と呼ばれている人である。

本年10月25日(金)午後1時40分から本校で高知県社会科教育研究大会を行う。6年の社会科公開授業で「新しい時代の幕開け(船中八策と大政奉還)」として龍馬の新政府綱領八策を学習する予定である。龍馬のラストメッセージを子どもたちに伝えたい。

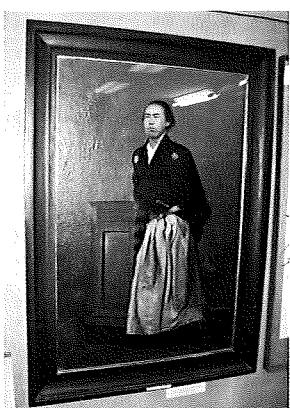
#### 四、龍馬学習と社会科研究大会

戦前の校歌には「ここぞ我らの学びの家居坂本龍馬生い立つ所」とある。それが現在の校歌(昭和39年制定)では、「城もほほえむ文化の園は坂本龍馬の生まれたところ心をみがき身をきたえあすの日本に役立とう輝く第四小学校♪」とある。

「坂本龍馬」の実名入り校歌はまだ他にもある。昭和30年代にあつた講堂には、龍馬の立像の絵(1.1×1.5メートル)が掲げられていた。その絵は現在は校長室に移された。洋画家、山脇信徳や作家、寺田寅彦などを教えていている。「土佐洋画界の父」と呼ばれている人である。

会の子どもたちがそれらの木に「りょうま」「おとめ」「しんだろう」と命名した。

時々、一年生の児童が登校した際、イチヨウの木に向かって「おはよう、りょうまさん」と挨拶しているのがほほえましい。



楠永直枝作、校長室にかかる立位の龍馬

#### (参観自由)

##### 高知市立第四小学校 校歌

植野三鶴 作詞

丸山和雄 作曲

二、城もほほえむ 文化的園は

坂本龍馬の 生まれたところ

心をみがき 身をきたえ

あすの日本に 役立とう



## 吾輩は猫である

宮川 穎一

どんな文章でも坂本龍馬の名前がでてくるとちょっと気になる。それが夏目漱石（慶應三年・大正五年）の『吾輩は猫である』の中であればなおさらだ。

この小説は明治三十八年（一九〇五年）に雑誌『ホトトギス』に連載された漱石最初の長編小説である。あまりにも有名なので説明も不要であろう。龍馬が登場するのは小説の前半部である。

吾輩の飼い主である苦沙弥先生は漱石の分身なのかいつも胃の調子が悪くタカジニアーゼなどの薬のお世話をりしていた。そんなある時、某氏から「それは接腹揉療治に限る。ただし普通のではゆかぬ。皆川流という古流な揉み方で一二度やらせれば大抵の胃病は根治できる」と聞いたようだ。そして「安井息軒も大変この按摩術を愛してた。坂本竜馬のような豪傑でも時々は治療をうけたと云うから、早速上根岸まで出掛けた。その揉み方があまりにも残して揉まして見た」のだ。しかし苦沙弥先生には合わず

一度で止めた、という一節である。

小説ではあるがこんな話を書くとは夏目漱石は実際に上根岸の皆川なる按摩師方でその施術を受けたのではなかろうか。その際に按摩師の口から施術の由緒として安井息軒や坂本龍馬などの昔の有名顧客の名前がでたのではないだろうか（あるいは某氏の言なのであろうか）。

龍馬は自分の風邪や怪我のことを度々手紙に記しているが、胃の具合が悪かつたなどと書いた部分はない。なのでもうか（あるいは某氏の言なのであろうか）。

日漱石が坂本龍馬を「豪傑」と書いているところが面白い。また明治三十八年には龍馬の名前が世間に普通に知られていたことも分かつて興味深いのだ。

今日は犬が歩いて猫に出会うの段である。



重文「書画貼交屏風」のうち猫図  
(京都国立博物館所蔵)

## コラム・龍馬のこと

### 「龍馬の銅像から龍馬さんへ」

中田 良政

私の実家は昔話“宇賀の大火”に出てくる高知市長浜の宇賀である。小学校の遠足と言えば桂浜となる、そこにはあの坂本龍馬の銅像が立っている。何の知識も無い頃から何気なく見てきた。今本拠地は豊田に置き文旦畑の手入れにたまに手結山に帰ってくる。

高校の頃NHKの“龍馬がゆく”を見ても原作に触ることもなく過ごしていた。

それが突然龍馬のファンとなっていく、それは“国盗り物語”をNHKでやるというので原作を買ったことに始まる。上巻を一気に読んで友人に貸したことではさは司馬遼太郎の虜になり“歴史の話で酒を飲む会”なる怪しげな集まりが出来た。そうすると坂の上の雲、峠、竜馬がゆくと読みあさりはじめて。ついに龍馬一辺倒の話となりとうとう寺田屋まで5名ほど泊まりに行くことになった。あの歴史的な建物に興奮してこの会は“歴史の話で酒を飲む会”であるために寺田屋のビールの在庫がなくなるというおまけまでつく。

そうして熱が高まった頃になんと今度は“坂本龍馬を十円札にする会”となり聖徳太子を十万に譲り“坂本龍馬を五万円札にする会”と変更した。

其の熱の高い頃に高知で“龍馬祭”が開催されるという連絡があり我が一寸フザケタそれでも真剣な会も参加する事となった。

まだ龍馬記念館も無い頃で国民宿舎も旧のものでそこで第一回の龍馬祭が開催された、参加されている方々はパリパリの龍馬研究の人たちがわんざかと居る会で一寸温度差を感じながら皆さんのが発表するのを聞いていた。そこでいろんな情報を頂き俄龍馬ファンが“龍馬さん”と呼ぶようになっていたのである。

## 話してみるかよ”

### 東洋暗殺

吉田東洋の会 会長 松本 和明

司馬遼太郎は著書「土佐の夜雨」のあとがきで「暗殺だけは嫌いだ。暗殺者は人間の風上にもおけぬ。その歴史的寄与は、ない。ただ、桜田門外ノ変だけは歴史を躍進させた例外である。以後の幕末の暗殺は、暗殺者の質も低下し功名心の対象となつた。暗殺者は否定すべき」と記す。

東洋の暗殺をその著書から追った。

武市は東洋に会う。徳川家は無用と。東洋は山内家は徳川の恩義を忘れては人道はないと。東洋は西洋事情を吸収し富国強兵策をとる開國論の立場。勤王攘夷論の武市には東洋は井伊大老と類似しに思えた。

武市の報告に党員は、関ヶ原以来粟飯を食らわされたのは郷士だ。藩こそ我々の敵。長曾我部から出た家系の東洋は郷士と同種族だが、見誤った。武市は薩長土三藩密約の実が消える焦燥感に駆られ、「斬る」と決す。

竜馬は憂う。武市の馬鹿め。全藩勤王は理想論。參政暗殺に老公が黙るまい。されば老公まで殺す覚悟はあるのか。

だが、武市は反東洋と糾合して暗殺を実行した。さらに京で、以蔵を含めた殺人者をして佐幕派の要人をを斬らしめた。

竜馬は武市を惜しむ。古来、暗殺で大事を成した者はない。

終に京の長州藩が駆逐されるや、容堂は勤王党の逮捕投獄に踏み切った。

東洋の横死は無駄死になるや。